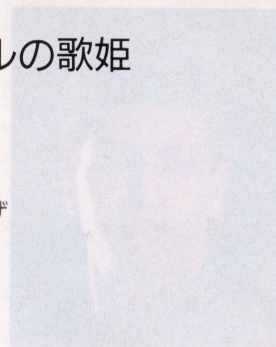


Ofra Haza

オフラ・ハザ



昨年のパリコレで、テーマミュージックの様にひんぱんに流された曲が、オフラ・ハザの「イム・ニン・アル」だった。

もともとエキゾチックなものに目がないうパリっ子たちが、この中東サウンドに興味を持たないわけがない。イスラエルの長い歴史の上に築かれた民族の叫びが、実に洗練されて、まったく独自のサウンドとなり、神秘的な響きとなって、彼らの心を捕えたのだ。

パリコレで注目される以前に、この曲はイギリスの過激なリミックス・ナンバーにコラージュされ、イギリスを始めとする全欧のディスコクラブ・シーンで大ヒットし、オフラの存在はクローズ・アップされていた。

神聖な宗教的意味合いの強い歌詞のこの曲を、リミックスに使用してしまったなんて、さぞかし天の神様も驚かされていることでしょうが、この出来事は、イスラエルではすでに長いキャリアを持つ国民的歌手であったオフラ・ハザにとっても、少なからずの驚きであり、世界進出を果す重要なきっかけとなったわけだ。ドイツのヒット・チャートでは8週間トップの座を獲得し、もちろんパリでも大ヒット。そして日本でもFM局が彼女の特集を何度となくやって、オフラ・ハザの名は知られるところとなった。

このところの中東サウンド、俗にエスノ・サウンドとかエスニック・サウンドとか呼ばれる音楽文化は、確かにパワーがある。パリでも人気のエスノ・サウンド「など」と言われ、パリのミュージシャンのことは知らなくても、ジプシー・キングスやオフラ・ハザのことは知っている日本のファンも大勢いる。

遠い国とはいっても、イスラエルにはオリエンタルの血が流れていて、オフラのサウンドは、なぜか日本人に郷愁さえ

感じさせる。なつかしい遠い昔を思い出させる様な、不思議な音と歌声なのである。

イスラエルを訪れ、オフラにインタビューをする機会に恵まれた私に、オフラは自分の曲について、こう語った。

「日本でも私の歌が流れているなんて、とても素敵なこと。日本のフォーク・ソング（民謡）に似たところがあると思う。言われるけれど、私の曲はイエメンからイスラエルに移って来た両親から教わったものなの。だから私の歌はイエメンとイスラエルの文化が混じったものと言えるでしょう。」

私たちイエメン系ユダヤ人のルーツから出来上がったものだから、独特の響きなのは当然。古代ヘブライ語で歌うことが多けれど、英語の曲もあります」

イエメン人の音楽的才能の高さは、歴史的にも証明されているくらいだから、オフラの才能も、天性のものと言ってしまうだろう。

オフラ・ハザは1958年に、イエメンからイスラエル政府の救済によってイスラエルに移り住んだ両親のもと、テルアビブに生まれた。何と13歳の頃から演劇をこころざし、18歳の時にレコード・デビュー、世界進出後のアルバム「イェメン・ソングズ」と「シャダイ」を含むと通算20枚のLPを発売したことになる国民的歌手である。

彼女の世界進出は、イスラエルの国民にとっても大変に誇らしいことらしく、国をあげて応援しているという。

イスラエルを訪れて驚いたのは、オフラの存在の偉大さということであった。テルアビブに限らず、エルサレム、エilatなどの主要都市で、タクシーに乗る。彼女の曲が流れている。運転手が口ずさんでいる。肩をゆすり、首をふりふ

り口笛まじりと一緒に歌う……。

「イスラエルには歌のうまい歌手はいくらだっているさ。でも歌がうまくて美人ときたら、オフラしかないね」

と、運転手は言った。いかに祖国で売れていようと、欧米諸国でモノになるかどうかは別問題。オフラをその位置に決定づけたのは、ミス・インターナショナルに輝く実績の多い美人の産地とも言われている、イスラエル人ならではの美貌も大きく味方しているようだ。

街のレコード・ショップに行く。オフラの今までの作品のカセットテープが並んでいる。ホテルのアーケードのショップなどでも、彼女が世界進出を果す前の作品など、新旧とりまぜて、彼女のカセット・テープはズラリ揃っている。イスラエルのレーベル時代にはジャンソンやカント・オーネ風もあって、あらゆるジャンルに挑戦し、どれもみごとな歌唱力を感じさせるものばかりで、興味深い。また、その頃の彼女のファッションやメイクが、一種アイドル風であったこともわかった。彼女自身、自分の歌、自分の曲が世界中からエスニック・サウンドとして受け入れられる時代がやって来たを意識したのは、最近になってからだと言う。

「いろいろなサウンドの流れがあって、



私たちもアメリカやイギリスの音楽は聴いているし、影響されている。でも、何か新しいサウンドというものが何なのか、みんな探している。私の曲は今までに聴いたことなかった様な曲でしよう？ いや、聴く機会がなかったという方がいから、エキゾチック、エスニック、ミステリアス、これをみんなが求めていたのだと思うの」

「シャダイ」の次に発売される予定のアルバム制作の最後の仕上げはロンドンのスタジオで行われ、発売レーベルはドイツだから、最近のオフラはイスラエルにいたことが少なく、ヨーロッパの必要所を飛び回っている。コンサートの数も日々増えているそうだ。

「今、世界中は、電話一本で話をすることが出来、いろいろな、それぞれ違う文化や能力をミックスすることが可能ですよ。だから、もっと世界中がいろいろな形で一緒に新しいものを作り出していくといいと、いつも思っているの。でも、だからこそ、自分の国の文化というものをより大切にしたいいけないと思う。これからの時代は今まで以上にオリジナリティが必要とされるんじゃないかしら」

妥協のないレコーディング作業に、本